

トリニダード・トバゴのカーニバル

白根 全（カーニバル評論家、ラテン系写真家）



大西洋を吹き渡る貿易風のたどり着く先が、カリブ海最南部に位置するトリニダード・トバゴ共和国（以下、トリニダード）である。千葉県ほどの面積に川崎市ぐらいの人口が暮らす、この島国のことを見知る人は少ない。南米大陸ベネズエラの海岸からわずか15キロメートル、西インド諸島の外れにある小さな島のカーニバルともなれば、さらに知られざる世界の話となるだろう。

リオデジャネイロとベネチアに並ぶ、世界三大カーニバルに数えられているのがこの島の祝祭だ。小さな島国の人々が「The Greatest Show on the Earth —— 地球上でもっとも偉大なショー」と胸を張るトリニダードのカーニバルとは、いったいどのようなものだろうか。

カーニバルはいつ、誰がもたらしたのか？

1498年、コロンブスの第3次航海の際に「発見」されたこの島は、スペイン領植民地として約300年間支配されてきた。トリニダード島はキリスト教の教義の三位一体、すぐとなりのトバゴ島は先住民が吸っていたタバコに因んで名づけられたといわれている。大陸部の植民統治政策を進めるスペインは、積極的にこの島を開拓することもなく、放置されたままの時代が続いてきた。

18世紀後半から、敵対するイギリスが東カリブ海域で存在感を増してきたため、スペイン国王はそ

れに対抗する目的で植民を募集した。使用人の数に応じた広大な土地を無償で提供する勅許書を1783年に出し、ヨーロッパ同盟国のカトリック教徒に呼びかけたのである。

これに応えて、革命で混乱するフランス本国や黒人奴隸の叛乱に揺れるサン・ドマング（ハイチ）、近隣のマルティニークやグアドループなどフランス領の島から、王党派貴族158世帯がトリニダード島に移住し、プランテーション経営に従事するようになった。この地に定住し莫大な資産を築いた彼らが、カーニバルの習慣を伝えたといわれている。とはいえ、当初は支配階層だけの仮装舞踏会が主流で、奴隸たちはそれを横目で眺めるだけだった。

複雑な人種構成と異文化共生社会

その後、イギリス艦隊によって奪取されたトリニダード島は、1814年にトバゴ島も併せて英領となつた。1834年8月1日をもって、すべての英領植民地で奴隸制が廃止された。不足するサトウキビやカカオ農園の労働力を補うため、はるか遠い植民地インドから年季労働者が導入された。

さらに中国やアラブ諸国からのイスラム教徒などの移民も増え、1962年に独立する頃には、支配層のヨーロッパ系市民が絶対的少数派となる多民族社会が形成されていた。現在ではインド系とアフリカ系がそれぞれ4割弱に加え、ドゥ

グラと呼ばれる両者の混血を併せると8割を超える、多文化が共存する人種構成になっている。首都ポート・オブ・スペインでは、英國国教会やカトリック教会とヒンズー寺院、イスラム教のモスクが並び建つ街頭の光景が見られる。

独立以前は黒人がカーニバルに参加することはおろか、太鼓の使用すら禁じられた時代が続いてきた。狭義のカーニバルの定義は音楽に合わせて仮装した群衆が街路を練り歩く行為、とされているが、そのキーワードは自由と叛乱、反抗と放縱、逸脱と転倒、飽食と蕩尽、暴力とパロディーなどなど。基本的にハレとケ、つまり日常の秩序を逆転させる非日常の解放的空间が期間限定で出現することにより、痩せ衰えた日常が活性化し、社会がいきいきと甦る機会を提供する。

もともとローマ・カトリック派の宗教／世俗行事だったヨーロッパ起源の祝祭が、大航海時代以降世界各地に広まり定着したのが、現在のカーニバルの立ち位置だ。なかでもラテンアメリカのカーニバルは、黒人や先住民、ひいては貧民層の抵抗の歴史もある。征服から先住民の絶滅や植民地支配、奴隸貿易、内戦、差別と貧困など負の遺産が多々存在した歴史の中から産み出された、人類史上でもまれに見る「幸福な発明」と位置付けられるだろう。大西洋の両岸で展開された、人類史上最悪の犯罪行為に数えられる黒人奴隸貿易

を思えば、「魂の救済」であり、「癒しと恵み」ですらある。

加えて、どんちゃん騒ぎ的側面だけで見られがちなカーニバルだが、音楽やダンスだけでなく演劇やデザイン、舞台、衣装、演出、表現など、通常はそれぞれが独立した多様なアートシーンが一堂に会する総合芸術でもある。黒人奴隸の抵抗の歴史の中から、これほど多面的な総合芸術が産み出されたことは、人間の可能性の限界を超える奇跡のような出来事ではないだろうか。

カーニバルを構成する3つの要素

トリニダードの多民族・異文化共生社会が持つ、特徴的なモザイク状の社会構造をそのまま反映しているのが極彩色のカーニバルだ。アフリカ起源の強烈な色彩とリズム、複雑な造形とヒンズー・アートの要素も、他では目につくことのできない祝祭空間を構成している。カーニバルのプログラムも多彩で、めくるめくリズムの激流に翻弄される圧倒的に濃厚な時空間が出現する。

それを代表するのがドラム缶の旋律打楽器スティールドラム、大衆歌謡カリプソとその現在形のソカ、そして華やかな仮装パレードのマスカレードという、祝祭を語る際に欠かせない3つの要素だ。この3つがそれぞれ複雑に絡み合いながら構成しているのが、唯一無二のジャンプアップ・カーニバルなのである。

パン=鍋とも呼ばれるスティールドラムはこの国の生んだ偉大な発明で、「20世紀最大のアコースティック楽器」といわれている。ちなみに、20世紀最大の電子楽器はシンセサイザーである。もとを正せばただのドラム缶で、産油国の当地ではどこにでも転がっている廃棄物。首都を望むラヴェンティルの丘を根城にする貧困層の若者の間で、相手チームよりカッコいい音を出せる楽器の発明が動機となって、1940年代に誕生した。

ドラム缶の片側を叩いてへこませ、区切られた面に音階を刻む。輪切りにした胴体部分の深さで音程が分けられ、もっとも低音域のベース・パンはドラム缶1本そのままのサイズ。組み上げられた12本のドラム缶の間を、転がるように演奏するパンマンのテクニックは圧巻そのものである。

搖らぎ系とか癒し系と評される優しい音の打楽器だが、これが100人規模で編成されるスティールオーケストラともなると、熱帯のハリケーンを思わせるその大迫力には心底圧倒される。全国予選を勝ち抜いてきた10チームが激突する決勝パノラマは、カーニバルの頂点に君臨する大イベントで、鍛え抜いた技で参加を勝ち取る日本のパンガールたちも増えつつある。



路上の祝祭に降臨するヒンズーの神々（写真はすべて筆者撮影）



楽譜は一切使われず、演奏はすべて各パートごと口伝えのアレンジによる



わずか3分間の持ち時間にすべてをかけるカーニバル・キングのパフォーマンス



参加者全員に高揚感と一体感をもたらすジュヴェ

すべての闘いはサヴァナで

市内にある広大な公園クイーンズパークサヴァナが、決勝パノラマほか大半のイベントのメイン会場になっている。「すべての道はサヴァナに続く」とカリブソの名曲にも歌われた伝説の花道だ。競馬場跡地に組まれた全長100メートルを超える特設ステージを舞台に、桟敷席を埋める大観衆を巻き込んだ熱い勝負が繰り広げられる。

カリブソは国内外の時事問題や政治、ゴシップなどをネタに、ピコンと呼ばれるウイットに富んだ風刺とユーモアを効かせた鋭い社会

批評を唄い込んだ歌詞が特徴の大衆歌謡である。市内に銅像も建つ歌う人間国宝ロード・キッチナーを始め、マイティ・スパロウやタンブーなど、歴史に名を刻むカリブソニアンたちが綺羅星の如く登場した。大衆芸能でありながら、ゆったりとした独特の所作は不思議な気品に満ちている。

この頂点に輝くのが王者カリブソ・モナークで、優雅な作法を守りつつ栄光の地位を競う歌合戦が、ディマンシュ・グラ（太った日曜日）というイベントである。同時に開催されるのはカーニバル・キングとク

イーンを決定する衣装コンテストで、全長10メートルの巨大衣装をまとったパフォーマーが、舞台狭しと踊りながら次々登場しデザインと演出を競い合う。ひとりでは到底支えきれない重量の衣装には補助車が装着され、踊り終わった演者は舞台袖に倒れ込むほどの重労働である。

熱い闘いの結果が発表され表彰式が終わると、打ち上げ花火を合図に深夜2時からいよいよ徹夜のジュヴェと呼ばれる路上パーティーが始まる。ペンキや泥を擦り付け合う大混乱が街中に広がり、いつの間にかその場にいる大群衆は全員カラフルに染め上げられてしまう。ワインという腰やお尻を擦りつけ合う、ちょっと卑猥なダンスも定番である。これぞ、トリニダードならではのジャンプアップ・カーニバルが炸裂する瞬間だ。

カリブソはソウル・ミュージックやヒップホップから影響を受けた、アップテンポでよりダンサブルなソカ=ソウル・カリブソへと進化している。さらにインド系住民がエスニシティーを主張するチャトニーや、ダンスホールと融合したラガソカなどのジャンルも大流行し、ラッパーが10ントトレーラーのサウンドシステムの上から群衆を煽るスタイルが一般的になってきている。

マスのバンドと移民社会のカーニバル

大音響に煽られて、大騒ぎしながらバンドと呼ばれる大小のチームごとにパレードするのが、ご当地名物のプリティー・マスカレード、通称マスである。もちろん外国人の観光客から、海外在住の帰省客まで、揃いの衣装を買えば先着順で誰でも参加可能だ。

サイズの異なる大中小50人から2500人規模のバンドが200以上あり、衣装とDJの選曲でいかに気分よく踊り騒げるかがその選択基準となる。大きなバンドにはトイレ付きのトレーラーが同行し、飲食物などさまざまなサービスが提供される。見物人を排除するセキュリティー担当から熱中症対策の看護師まで至れり尽くせりで、衣装デザイナーも兼ねたバンド・リーダーが、全体の演出や進行をオーガナイズしていることが多い。

他方、北半球の先進国の中でも社会に定着したニューヨークのブルックリン・カーニバルやロンドンのノッティングヒル・カーニバル、カナダはトロントのカリバナなどは、トリニダード系移民を中心となって繰り広げられる、地域最大級のイベントになっている。やはりどこでも、華やかなマスがもつとも人気を集めている。巨大スポンサーが資金提供することもあり、出演するミュージシャンなど本国より内容が充実しているケースも見られる。世界各地に移り住むディアスボラと故郷を知らない次世代にとっては、伝統や自らのアイデンティティーを再認識する場ともなっている。

費用は年々高騰しているが、数千ドル単位のバンドが即座に売り切れになるほどの人気を誇る老舗バンドもある。こうなると地元民は参加不可能だし、宿泊施設などのキャパシティーを上回るオーバーツーリズム問題や治安の悪化も取りざたされている。さらに商業化するカーニバルの未来がどうなるのか、伝統的なスタイルをどこまで維持すべきかなどなど、今後の展開から目が離せない。



揃いの衣装で盛り上がるバンドのメンバーたち

豊穣なクレオール文化が育んだ芸術性

それにしても、この小さな島国でこれほど豊かな祝祭が誕生し発展してきたのは、なんとも不思議に思えてくる。ハリケーンのコースから外れた穏やかな自然環境や、比較的豊かな産油国経済の恩恵も当然あるだろう。それに加えて、稀代の政治家エリック・ウィリアムズからノーベル文学賞作家V・S・ナイポールまで、名だたる逸材を多々育んできたこの島の文化や芸術のレベルの高さには注目すべきものがある。クレオール世界の豊穣さ、と言い換えられるかもしれない。

オリンピックの開幕式など大イベントのセレモニーの演出を担当したパフォーミング・アーツ界の大御所ピーター・ミンシャルも、最初はこの島のカーニバル衣装のデザインからスタートしている。トリニダード、恐るべし！

最後にトリニダードのカーニバルを舞台にした必読書を、一冊だけ挙げておきたい。アル・ラヴレイス著『ドラゴンは踊れない』(中

村和恵訳、みすず書房刊)——傑作である。

(しらね ぜん カーニバル評論家、ラテン系写真家)